

慢性炎症性疾患により心臓血管病や糖尿病のリスクが上昇

臓器特異的および全身性の慢性炎症性疾患があると、心臓血管病や糖尿病のリスクが上昇するかについて、コホート研究を実施し検討した。

英国の臨床データベースより、重度乾癬 5,648 例、軽度乾癬 85,232 例、水疱性皮膚病 4,284 例、潰瘍性大腸炎 12,203 例、クローン病 7,628 例、炎症性関節炎 27,358 例、全身性自己免疫疾患 7,472 例、全身性血管炎 6,283 例を抽出し、これらと適合させた 373,851 例を対照群とした。結果として、新たな糖尿病の発症は 4,695 例、冠状動脈性心臓病の発症は 3,266 例、脳卒中の発症は 1,715 例であった。相対ハザードが最も高かったのは全身性自己免疫疾患で 1.32、次いで全身性血管炎で 1.29 となった。臓器特異的な慢性炎症においても相対ハザードは高値を示し、重度乾癬で 1.29、潰瘍性大腸炎で 1.26 となった。C-反応性蛋白（CRP）の最高三分位の被験者においては、糖尿病、心臓病、脳卒中のうちの複数を発症するリスクが高かった（相対ハザード：1.52）。したがって、臓器特異的および全身性の慢性炎症性疾患があると、心臓血管病や糖尿病のリスクが増し、またそのリスクは炎症の重症度に伴って高まることが示された。慢性炎症性疾患の管理にあたっては、心臓血管病リスクの低減も重要であることが示唆された。

出典：Circulation. 2014; 130: 837-844